

唐津・杵島の石炭産業

経済の発展を支えた炭鉱の賑わい



明治時代の近代化と第二次世界大戦後の復興を支えた主要エネルギーが石炭です。佐賀にも多くの炭鉱があり、当時の日本経済を支えました。



(武雄市教育委員会提供)



(武雄市教育委員会提供)

杵島・西杵炭鉱 武雄市北方町には杵島炭鉱がありました。のちに、

産業革命を支え、世界を変えた石炭

18世紀後半にイギリスで起こった**産業革命**は、世界を大きく変えました。その原動力となったエネルギー資源が**石炭**です。**蒸気機関**が発明され、工場の動力や蒸気機関車・蒸気船などの燃料として、石炭が注目されることになりました。これにより、工業

調べてみよう
石炭はどんな風に
使われたんだろう？



(武雄市教育委員会提供)



「武雄・杵島・廻野・杵島・藤津の昭和」樹林舎より
(武雄市教育委員会提供)

その一部が明治鉱業の西杵炭鉱になりました。



(フリー素材)

石炭 近代になり蒸気機関やストーブの燃料として使われてきた石炭。現代も、発電のほか製鉄に不可欠の資源です。

技術は飛躍的に発展しました。

日本でも、石炭の採掘と利用は江戸時代からありましたが、産業として確立したのは、明治の近代化のころです。

第二次世界大戦直前には、世界のエネルギー源の約80%を石炭が占めていました。

大戦を境に、徐々に主要エネルギーは石油に代わることになりましたが、日本では、大戦後しばらくは石炭が主要エネルギーとして、戦後の復興を支えました。しかし、高度成長期と呼ばれる1960年代に入ると、日本の主要エネルギーも石油にとって代われ、石炭産業は衰退しました。同時に、石炭によって発展した日本各地の町も衰退していきました。

日本有数の炭田があった唐津地方

佐賀県にも、昭和40年代まで、現在の多久市、大町町、北方町(武雄市)、唐津市に**炭鉱***1が存在していました。特に大きな**炭田***2があったのが唐津地方です。

*1 石炭を掘り出す鉱山のこと。
*2 石炭が豊富に埋蔵されている地域のこと。

明治初期のころは唐津地域の炭鉱の出炭量は、九州内で大規模な炭鉱があった地域として知られる筑豊地域(福岡県中央部から北部)や三池地域(福岡県南部から熊本県北部)よりも多く、日本最大級だったと言われています。

炭田の町は明治から第二次世界大戦直後まで賑わいました。一帯で採掘された石炭の輸送のために1903(明治36)年、西唐津～久保田間の鉄道が、1912(明治45)年には山本～岸岳間(現在は廃線)が開通しました。その後、唐津港も整備され、石炭は地域の発展を支えました。

その中で特に大規模だったのが、**芳谷炭坑**と**相知炭鉱**です。明治のころまで、一部の炭鉱は海軍が管轄して請負人が石炭を掘るといふかたちで運営されていました。しかし、多久出身の資本家・**高取伊好**らが



(多久市郷土資料館提供)

高取 伊好

1850(嘉永3)年～1927(昭和2)年



相知炭鉱の風景(明治時代)

(唐津市近代図史館提供)

高取伊好が操業した相知炭鉱は1900(明治33)年、三菱が経営を引き継いだ。

COLUMN

せいけい 高取伊好と西溪公園

高取伊好は多久家の家臣の家に生まれ、多久の学問所・東原岸舎、慶心義塾で学んだのち工部省鉱山寮で鉱山学を学び、国営の炭鉱で技術長などを務めた人物です。彼は、炭鉱で得た財を地域の発展のために惜しみなく注ぎました。学校や公共施設建設など、高取が生涯で寄付した額は、大正時代の旧多久村の年間予算の200倍を超えています。

西溪公園は多久領家老の屋敷だった場所で、1923(大正12)年、高取が私財を投じて公園として整備し旧多久村に寄付しました。現在も残る美しい日本家屋「寒鶯亭」は村の公会堂として同じく高取が寄贈したものです。名前は、多久で学び世に出る若者たちを、飛び立つ春に備えて寒い時期に鳴く練習をする鶯に見立てて付けられました。



(佐賀市観光連盟提供)

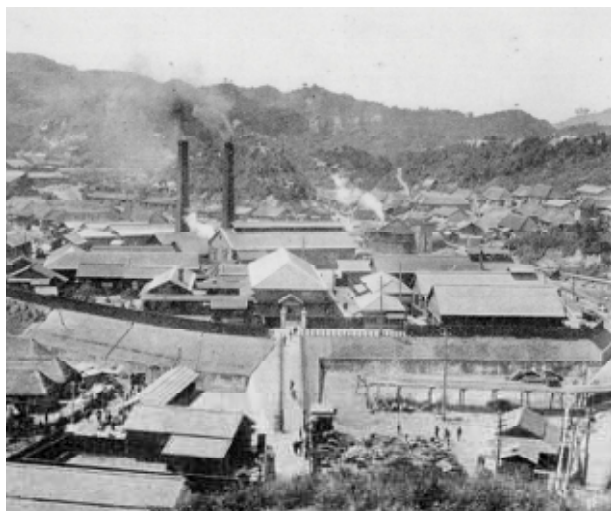
唐津のいくつかの炭鉱の採掘権を買い取り、1885(明治18)年に**芳谷鉱山会社**を設立しました。1892(明治25)年には、唐津の炭田は海軍直営から完全に民営化されました。芳谷鉱山会社は、最盛期には約2000人の従業員がいました。

相知炭鉱は、もともと地元の人によって小規模な採掘が行われていました。高取は相知にも良質の炭層があると考え、1896(明治29)年に採掘権を買い取り、鉱脈を発見しました。資金不足のため、採掘権を三菱財閥に売却してしまいましたが、その後、相知炭鉱は日本有数の炭鉱となりました。高取は、相知炭鉱の価値をいち早く見抜いていたのです。

国内外に知れ渡ったキシマコール

相知炭鉱を売却した資金を元手に、高取が開発に着手したのが、北方町(現在の武雄市)と大町町に広がる炭田です。高取は、北方町と大町町に豊富な石炭層がある手応えを得て、所有する芳谷炭坑の権利を売却

しました。その売却金をもとに、1909(明治42)年、杵島地方の約410万坪に及ぶ土地にあったいくつかの炭鉱を買収し、杵島に高取が所有する一大炭鉱群が誕生しました。



芳谷炭坑の風景
炭鉱会社の建物がひしめきあっています。
(『北波多村史』より転載)

1918(大正7)年、高取炭業株式会社を設立し、のちに会社名を**杵島炭礦会社**としました。大正時代の初め、杵島地方の炭鉱の出炭量は60万tを超え、佐賀県内の全出炭量の約3割近くを占めるほどになり、芳谷や相知からの出炭量を上回りました。従業員は5000人を超え、高取は「佐賀の炭鉱王」と呼ばれるまでになりました。

杵島地方から採掘される石炭は質の高さでも知られ、上海や東京などで「キシマコール」※3と呼ばれ、汽船用石炭として使用されました。

※3 コールは英語で石炭のこと。

石炭搬出港として高取が整備した**住ノ江港**(現在の小城市及び白石町)は、1919(大正8)年、国の特別輸出入港に指定され、佐賀の経済発展を支えました。本拠地だった大町町は石炭景気に沸き、1950(昭和25)年には人口が23000人を超えます。大町小学校は、1958(昭和33)年には、児童数4000人を超えるマンモス校となりました。しかし、このころからエネルギー政策は石炭から石油に転換され、全国の炭鉱が次々と

閉山する中、1969(昭和44)年、杵島炭鉱もその歴史に幕を降ろしました。

石炭は、近代工業の最初の発展を支えました。良質の石炭を生産していた佐賀県が、日本の近代化と経済の発展に果たした役割は大きかったと言えます。

学校の取組

【大町煉瓦館大町子どもガイド】

大町ひじり学園

大町のことを学習し修了証書をもった大町ひじり学園の小中学生が町を案内しています。



調べて書いてみよう!

石炭産業が栄えていたころの産炭地域の人口の推移と、街の様子を調べて書いてみましょう。



読んでみよう!

『さが100年の歴史—20世紀の群像』 『にあんちゃん』
佐賀新聞社刊 西川文庫刊ほか



出かけてみよう!



きたがた四季の丘資料館 (武雄市北方町大字志久)

石炭産業にまつわる資料や、炭鉱で使用されていた採掘機器、写真パネルを展示しています。

TEL 0954-36-6023 / 休館日 月曜日 / 開館 8:30~17:00
(武雄市北方支所まちづくり課提供)



西溪公園と寒鷲亭 (多久市多久町 1975-1)

寒鷲亭は多久市公会堂として文化活動などに広く利用されています。

TEL 0952-74-3591 (指定管理者:西九州建設株)
(多久市郷土資料館提供)

検索してみよう!

東原彦舎

唐津石炭産業史

石炭産業の歴史

